

たまねぎの生産を もつと楽に効率的に

たまねぎの機械化一貫体系実証

田茂木の坂本謙太さんの畑では、たまねぎの栽培実験が進められています。西北地域県民局が進めている「水田を活用した加工・業務用野菜の産地化推進事業」の一環で行われていて、機械を使った収穫作業の実演が7月24日(火)にありました。たまねぎを掘り取る機械と、掘り取ったたまねぎを拾い上げてコンテナに移す機械の実演がありました。たまねぎ栽培の機械化の目的は、一連の作業の省力化による人件費の削減や、後作による販売金額の増加などがあります。また、稲作から単価の高いたまねぎへの転作により、農家の収入の向上も挙げられます。今回の実証実験で収穫されたたまねぎは、出荷できるサイズを十分に満たしており、今後、水田を転用した収益性の高い畑作農業に、大きな期待が寄せられます。



上手に外せた！

津軽海峡メバル網外し体験ツアー開催

活ハマクラブ(代表・宮下一也)が、毎年恒例となっているメバルの網外し体験ツアーを7月14日(土)に開催しました。

活ハマクラブは、メバル漁師・漁協などの若手を中心のまちづくり団体です。この体験ツアーは、町内外にメバルでまちおこしを広くPRするために開かれています。今回の体験ツアーには8人の申し込みがあり、はじめにメバルがどういう魚でどうやって獲っているのか、前日の漁で獲れた実物のメバルを目の前に説明がありました。場所を移して、マイナス10度の製氷庫を見学し、メバルの刺身とじゃっぱ汁を堪能しました。

最後に、漁から帰ってきたばかりの漁船の前で網外しを体験しました。



参加者たちは夢中になり、真剣な眼差しでメバルにかかっている網を外していました。田舎館村から来た家族に話を聞くと、「子供たちと釣りによく行くが、海で取れた魚がどうやって食卓まで届くのかを、この体験ツアーで見せたいと思い参加した。子どもたちに貴重な体験をさせることが出来てよかった」と、メバルの網外しに夢中の子供たちを前に満足した様子でした。

この体験ツアーは、8月18日(土)にも予定されています。申し込みは8月15日(水)までに中泊活ハマクラブ(☎64-2641)まで。



ピュア宅配便出発セレモニー開催

地域で生まれ、地域で育ち、地域を助け、地域で安心して老後を迎えることが出来る社会のために



「ピュア宅配便・見守り号」の出発セレモニーが、8月1日(水)に中泊町農産物加工販売所「ピュア」で開催されました。濱館町長はあいさつの中で、「人口減少・高齢化社会といった地域課題の突破口となるのがピュア宅配便・見守り号である。ぜひ登録して欲しい」と事業説明と意気込みを話しました。ピュア宅配便・見守り号は、たくさん見守り人に見守られて出発しました。

この日、お花とメバ焼きを宅配注文した木村アキエさんは「今までバイクでピュアに野菜を持って行っていた。最近バイクで行くことが少なくなっていたので、ピュア宅配便は便利で助かる。見守りを兼ねている点では安心して生活が出来る。」と話していました。

ぜひ中泊町に来てください!

中里小・武田小修学旅行PR

町では、「メバル押し」で事業を進める中、一緒にメバルをPRしてくれる「メバルっ子」の育成に取り組んでいます。

6月8日(金)の給食には、メバルの塩焼きを提供しました。メバルを自分で実際に食べて、PRに活かしてもらうための取り組みです。中里小学校には濱館町長もかけつけ、一緒に給食を食べました。また、役場の職員もメバルの生態や漁などの説明



をしました。児童たちは、メバルを給食で食べられたこと、修学旅行でのPRの前にメバルを味わえたこと、そして濱館町長と一緒に給食を食べられたことがうれしかったそうです。

6月29日(金)には中里小学校と武田小学校の6年生が、修学旅行で訪れた函館市の函館駅前で、町のPRを行いました。

中里小学校6年生20人は、笑顔で話す練習をしてから、PR活動をしました。県内で水揚げナンバーワンの津軽海峡メバルや歴史ある人形芝居の金多豆蔵といった見どころを紹介しました。

また、新幹線と2次交通バス「あらま号」で函館市から中泊町に来ることができるともPRしました。



工藤那絃君は、「前もってセリフを暗記した。はじめは、緊張してセリフを噛んでしまったが、声をかける回数を重ねていくうちにおもしろく感じるようになった」と楽しそうに話していました。

武田小学校6年生15人も、積極的にPRを行いました。

当日は、雨が降ったり止んだり、道行く人の足どりも早くなっているなか、PRのために懸命に声をかけていました。

鈴木和咲さんは「なかなか足を止めてもらえなかったが、先にパンフレットをわたしてから町のPRをした」と言い、工夫していたようです。

竹越姫那さんは「中泊町がどこにあるのか説明して、メバルや金多豆蔵のアピールをした。はじめは緊張していたが、通行人に足を止めてもらうことで自信になった」と手ごたえを感じていたようです。